

移動の運動感覚を取り込んだ認知意味論：  
ドイツ語の前置詞durchの分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 義晴 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/994">http://hdl.handle.net/2297/994</a>

# 移動の運動感覚を取り込んだ認知意味論

—ドイツ語の前置詞 durch の分析—

竹 内 義 晴

## 0. 初めに—よりやわらかで現実的な意味の理論を求めて

ことばの意味などというものに関心を持ったりするのは昔から時間をもてあました遊び人や変人と相場が決まっていた。言語表現の意味というのは言語が使われるリアルタイムの現実の上に成り立っているものであって、それについて疑ったり、悩んでいてはその日の飯にありつけなくなってしまう。新しい言語に遭遇した旅人は、新しい出会いに感動して思索にふける前に、言語の壁を乗り越え、身体の安全を確保し、生活の見通しを立てなくてはならない。このような時、**直感と成り行きに身をまかせ、とにかく行動し、慣れ・なじむ**、という戦略によらずに、**言語ベースの論理的整合性を頼りにして、生き延びる道を切り開く**のは、その才能によほど恵まれていなければ、相当に難しいに違いない。日常の生活においてすらも、コミュニケーションの場に飛び交う言葉の端々に気を止め、つじつまあわせにこだわっているのは、とんびに油揚げをさらわれてしまう。

とは言っても、いつの世にも言葉のやり取りのくい違いや、言語表現と現実の間の食い違いにかかわることによって口に糊する調停者としての役人、弁理人、天下宇宙の理を説く坊主、御用学者のような職業は存在していた。たいていの日常の人間相互のやり取りは、多少こじれたとしても、いつのまにやら取るに足らないことの一つとして記憶の片隅に追いやられてしまう。世間の動向、宇宙の変化も大事がなければ、気にも止められずに見過ごされてきた。ただ、やり取りがこじれ、争いが生まれたとき、人はつじつまの合う解決を求め、それはその専門家としての調停者にゆだねられてきた。宇宙・天下に混乱が起こると、坊さんや学者による説明を受けて、多くの場合人々は、その理屈をやむなくも受け入れ、納得いかないまでも、整理をつけざるをえなかったのだろう。明日からの仕事が待っているのである。

そんなわけで、言葉についての議論はもっぱらそのような、言葉に関心を向ける余裕、または、時間のある人々によって、自己省察的、かつ論理整合主義的な伝統を積み重ねられてきたのだった。そのような人々とは、つまり、

調停者や坊主・学者、暇人、遊び人、変人だったのである。

ところで、冒頭に述べたように、私たち人間の言語生活の根幹は、自己省察的で言葉の端々に囚われる性格のものではない。理屈に基盤を置いているのではないのである。少なめに見積もっても、半分や三分の二以上は、私たちの、後先振り返ることすら知らない、あわただしい生活の営みに根をおいているに違いない。とするならば、現代の論理的な風合いを基調としている言語論の伝統はさまざまな歴史の積み重ねの上に成り立っているものだと思うが、そこに単純に信用を置いてよいものだろうか。私たちはむしろ、ことばを使った生活の事実を目を向けつつ、でき合いの言語観に批判的な検討を加えていくべきなのではないだろうか。

この論文では、私は、身体に基づいた運動感覚を私たち人間という動物の最も基本的な次元として基底に据え、従来論理的な観点から記述されてきた空間に関する言語表現の意味を、この観点からとらえ直してみれば、ずっとすっきりとした意味記述が可能になるのだということを示そうと思う。

まず、第1章では Edward Lang 91 の議論にそって、二段階意味論といわれる、前置詞の意味論のための理論的枠組みを簡単に紹介する。第2章では、二段階意味論を使った、ドイツ語の前置詞 *durch* の論理主義的な分析例として、Ingrid Kaufmann 91 の分析を紹介する。さらに第3章では、Kaufmann の提案について批判的に検討し、第4章では、身体・運動感覚を基底に据えると、どのような分析が可能になるのか、私の提案を示そうと思う。最後に第5章では、私の提案の妥当性と今後の研究の展望に触れて、この論文を締めくくる。

## 1. 二段階意味論 (Edward Lang 93 による)

ここで紹介する、二段階意味論 (the two level approach to semantics) では、意味形式 (SF) と概念構造 (CS) の二つの意味のレベルを認めて、自然言語表現の意味と統語構造の問題を処理しようとする。こう書けば、この議論は N. Chomsky の GB 理論の延長上に展開されている、ということがわかる。二段階意味論の理論的枠組みは、Bierwisch 83, 88, Lang 87 以来今日まで、めまぐるしく変化する現代の言語理論のパラダイムの変遷を考えれば、ドイツ語圏の言語研究者を中心に結構長めの伝統を作り上げてきた。

意味形式 (SF) も概念構造 (CS) のいずれも私たちの脳に蓄えられている知識である。意味形式 (SF) は言語的な意味知識であり、概念構造 (CS) は言語外的な知識である。二段階意味論によれば、意味形式での情報が概念構

造における情報処理と組み合わせられることによって、言語が実際の私たちの複雑な知識活動を支える意味処理の道具たりえているのである。

一般に、前置詞を述語に使った文の統語構造は (1-DF) のように一般化できる。この時  $x$  は前置詞 PRAEP の外部項であり、 $y$  は内部項である。統語構造 (1-DF) の意味形式は (1-SF) である。LOC は位置付けをあらわす述語である。REG\* はそれぞれの前置詞の意味標記によって定められる固有の領域である。

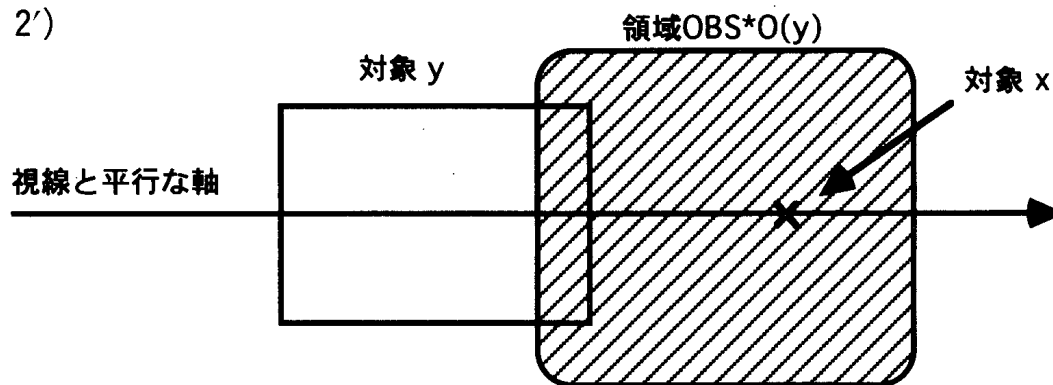
例えば、前置詞 vor の意味標記は、およそ (2) である。この場合の REG\* は OBS\*O という領域である。OBS\*O ( $y$ ) は、対象  $y$  を基準にして、視線と平行の軸にそった、起点ではない方の領域である。(2') のように図示すると理解しやすいが、およそ日本語で「前」と表現される領域ということになる。対象  $y$  を起点とする軸があって、その軸の向かう方向は「前」である。その軸の起点から見て負の方向が「後」である。

1-DF)  $\underline{x}$  PRAEP  $y$

1-SF) (LOC( $\underline{x}$ , REG\*( $y$ ))...)

2) vor:  $\wedge x, \wedge y$  (LOC( $\underline{x}$  (OBS\*O( $y$ ))...)

2')



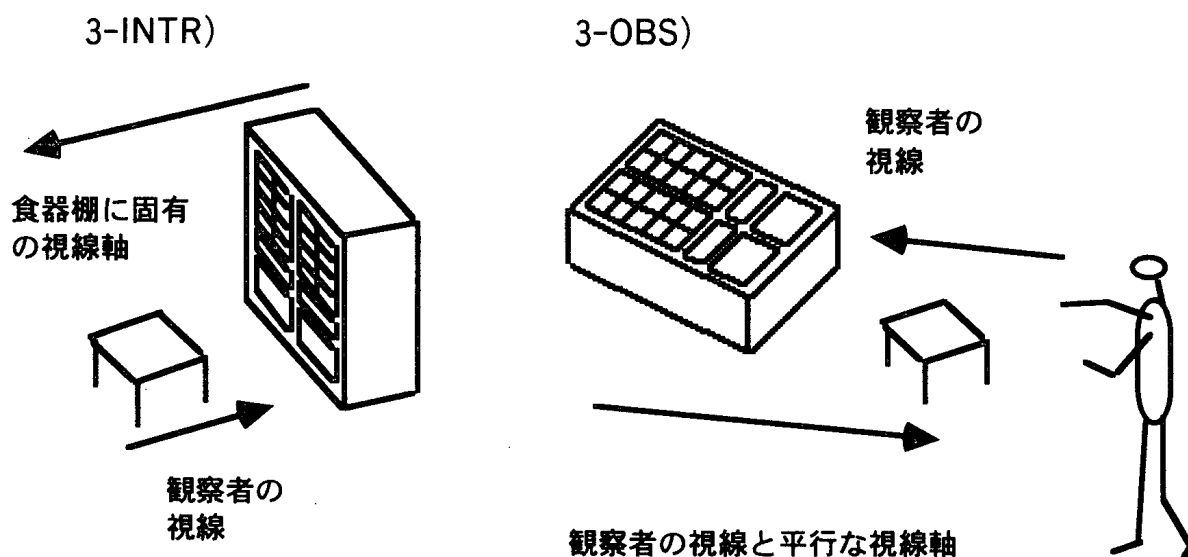
前置詞 vor を使った例文 (3) について考えてみる。例文 (3) の意味構造は (3-SF) であり、その意味するところは、対象  $x$  は対象  $y$  の前に当たる領域に位置している、ということである。

3) Der Tisch ist vor dem Schrank.

3-SF) (LOC( $\underline{x}$  (OBS\*O( $y$ ))...)  $\underline{x}$ =der Tisch,  $y$ =das Schrank

ところで、例文 (3) について、図に表わすとはっきりするのだが、少なく

とも二通りの解釈が可能である。



食器棚にはそれを見るための固有の視線軸がある。この軸にそって食器棚について形を観察し、認識するのが、自然で無理がない。この自然な視線軸を基準に、私たちは食器棚の正面や裏側について考える。この、自然な視線の軸によって決まる前面にテーブルが位置するというのが (3-INTR) に表わした一番目の解釈である。この解釈では、観察者は食器棚の正面にいて、食器棚固有の視線軸と平行な逆方向の視線を食器棚に向けている。

(3-OBS) の絵では、食器棚が床に斜めに倒れていて、自然な視線の軸によって決まる、食器棚そのものの前面を「前面」と言いにくい。この食器棚の本来の前面は上面なのだ。この食器棚の前後を語ろうとする場合、観察者と食器棚との関係から決まる食器棚の前面が優先されるのが自然だ（この絵の場合は食器棚の本来の底面）。このように、観察者との関係から決まる前面にテーブルが位置するというのが二番目の解釈である。

さて、二段階意味論では、この二通りの解釈がでてくることを、意味標記 (SF) レベルと認知構造 (CS) レベルとのインタラクションによって説明する。食器棚は三次元空間に位置を占める物理的対象であり、とりわけ、固有の視線の軸というものを持っている。この情報は、人間の知識における情報であり、認知構造 (CS) に蓄えられているものであり、ここまで細かい情報が、言語の意味情報に含まれているとは考えない。

ここでの食器棚のような物理的対象物の空間的性質についての情報は、基本的対象物空間 (Primary Object Space) における対象物スキーム (Objekt Schemata(OS)) として標記される。私たちの事物についての知識には、この

手の莫大な量の情報が蓄えられていて、必要に応じて呼び出され利用されるのである。

#### 4) OS\_CUPBOARD

cupboard	< a	b	c >
	<i>vert</i>	<i>across</i>	<i>obs</i>
	F', i-top	S, i-les	O', i-back
	F, i-bottom	S', i-ris	O, i-front

---

食器棚の対象物スキームは、対象物の持つ a、b、c の三つの軸についての変項によって構成されている。食器棚の場合、この三つの変項は、垂直方向 (*vert*)、横断方向 (*across*)、観察の視線方向 (*obs*) についてのものである。食器棚の垂直方向は、本来の底面 (*i-bottom*) と天板面 (*i-top*) である、点 F と F' によって規定される。横断方向は、本来の左側 (*i-les*) と右側 (*i-ris*) である、点 S と S' によって規定される。観察の視線方向は、本来の前面 (*i-front*) と本来の背面 (*i-back*) である、点 O と O' によって規定される。棒線の下部の空欄は、状況や言語コンテキストとの関連で調整がなされた結果が書き込まれる場所である。

たとえば、デフォルトの解釈では、食器棚の本来の前面と実際に指示される前面は一致する。他方、食器棚が斜めに倒れ上向きになっている場合、状況コンテキストを考慮した情報処理の結果、本来の天板面と底面はそれぞれ指示上の背面と前面に、本来の背面と前面はそれぞれ指示上の底面と天板面に、情報が置き換わる。

#### 5a) Schrank (デフォルトの解釈)

cupboard	< a	b	c >
	<i>vert</i>	<i>across</i>	<i>obs</i>
	F', i-top	S, i-les	O', i-back
	F, i-bottom	S', i-ris	O, i-front

---

			d-front
--	--	--	---------

5b) *Schrank* (食器棚が斜めに倒れ上向きになっている)

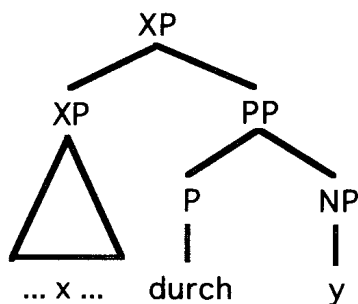
cupboard	< a	b	c >
	<i>vert</i>	<i>across</i>	<i>obs</i>
	F', i-top	S, i-les	O', i-back
	F, i-bottom	S', i-ris	O, i-front
	d-back	i-les	d-bottom
	d-front	i-ris	d-top

意味形式レベルにおいて、例文(3)の意味形式(3SF)には、OBS\*Oという意味の単位が書き込まれていた。このOBS\*Oが実際にどのような領域を指し示すのかは、概念構造レベルにおいて、上記のように標記された食器棚の空間情報とのインタラクションによって決定する。OBS\*Oは指示上の前面、d-frontとマッチングを起こすが、それはデフォルトの場合、本来の前面のことなのであり、食器棚が斜めに倒れ上向きになっている場合は、食器棚の本来の底面のことだということである。

2. 二段階意味論を使った前置詞 *durch* の分析(Ingrid Kaufmann 93 による)

Ingrid Kaufmann は、二段階意味論の枠組みを使って、前置詞 *durch* の分析を行なっている。以下にその分析を紹介する。Kaufmann の提示した *durch* の使用例、説明の用語などは一部変更を加えた。また理論面についてもなるべくかみくだいて説明するようにした。前置詞句の一般的構造とその構成要素の呼び方について、確認する。前置詞句は一般に(6)のような形式を持っている。この構造において、xをこの前置詞句の外部項、yを内部項と呼ぶ。*durch* の意味形式(SF)はKaufmannによれば(7)のように標記される。

6)

7)  $\text{durch}:\lambda x\lambda y(\text{INCL}(\text{D}(x), \text{S}(y))\& \text{LOC}(x, \text{INT}(y)))$

$D(x)$  は経路 (path) のパラミターであり、対象  $x$  の概念構造に含まれる次元の一つと一致する。 $S(y)$  は対象  $y$  についての交差線であって、対象  $y$  の境界上の異なる 2 点、 $a$ 、 $b$  を結ぶ線分  $[a, b]$  として定義される。 $S(y)$  は点  $a$ 、 $b$  以外は、 $y$  の内部の点によってのみ成り立つ。コンテキストによって  $S(y)$  の現われ方は影響をうける。たとえば、対象  $y$  の境界が問題にならないコンテキストにおいては、 $S(y)$  は開かれた線分  $(a, b)$  として理解される。 $Sc(y)$  を実際のコンテキストにおける  $S(y)$  の現われであるとする。この時、**INCL** は包含関係であり、 $D(x)$  と  $S(y)$  の間では、この包含関係は (8) のように解釈される。

- 8) **INCL** ( $(x), S(y)$ ) は  $Sc(y) = [a, b]$  の場合に限って  $D(x) \supset S(y)$  と解釈される  
**INCL** ( $D(x), S(y)$ ) は  $Sc(y) = (a, b)$  の場合に限って  $D(x) = S(y)$  と解釈される

**INT** ( $y$ ) は対象  $y$  の内部領域であり、**LOC** は場所を占めることを表現する述語である。前置詞 **durch** が使われた場合、経路を含む対象  $x$  は、必ず対象  $y$  の内部領域に位置を占めていなければならない。

経路は、(**PATH** と標記されるような)経路を表わす意味論的単位によってではなく、パラミター  $D(x)$  によって意味形式に表示してある。経路の概念が成り立つための条件は、異なる二つの場所の連絡関係か、順序づけによる方向性のどちらかが満たされることだという。そして、このような、選言的条件によってしか規定することができない経路概念は、存在論的に統一的に扱えるステータスを持っていないのだというのである。

例 (9) では (a)、(c)、(e) の名詞は、道、電線、串であり、経路に似たゲシュタルトを持っている。しかし、(d) の例からわかるように、経路は必ずしも対象のゲシュタルトとして与えられる必要はない。バスは何らかの形で経路を提示するゲシュタルトを持っているのではない。(f) では、経路は知覚に関係している。(a)、(c) では、何かが経路にそって移動するが、(e)、(g) ではそうではない。(e)、(g) では明らかな方向性もない。以上のことから、意味論的単位 **PATH** を想定して単純に経路を扱うようなことはできない、というのである。



(BOUNDARY) または横断 (INTERSECTION) する対象を示す名詞であって、その概念は (13) のように標記される。

12a) der Zaun durch den Wald

b) die Mauer durch Berlin

13) 垣根、壁：ゲシュタルト特性 OS:<max, vert, sub>

機能特性

BOUNDARY (bounding  
obj., region, ...)

完全横断の条件によって例 (14) が受け入れられないことが説明できるのだという。じゅうたんや棒は境界づけをする対象でもなく、方向性を持った対象でもないから、**durch** とは使われない。しかし (15) では、**quer** (横切つて) のような要素が付け加えられて、完全横断という情報が与えられ問題のない表現になる、というのだ。

14a) ?der Teppich durch den Flur

b) ?der Stange durch das Zimmer

15) der Stange quer durch das Zimmer (wurde für Balletübungen angebracht).

(16) は、外部項の名詞の指示対象が、経路機能を持っている例である。自動車 (car) とバス (bus) の概念標記はおおよそ (17) であって、バスの機能特性から経路パラミターの内容が導かれるのだという。

16a) der Bus durch Köln

b) ??das Auto durch Köln

17a) car: ゲシュタルト特性：OS:<max, 0, vert>

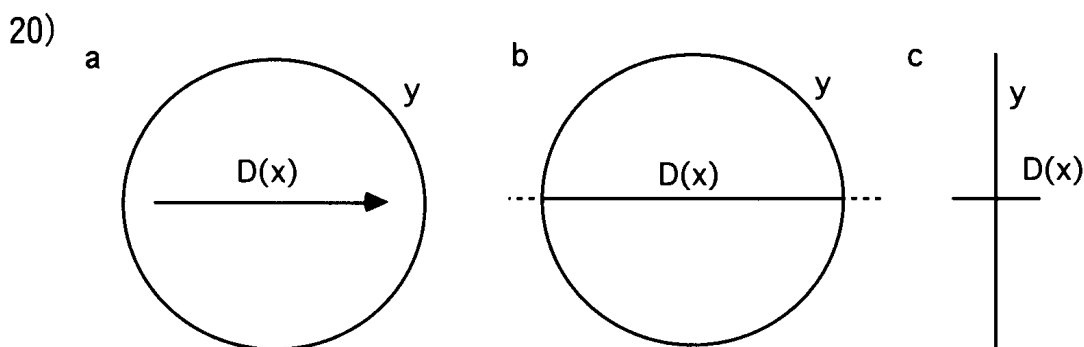
(human)

機能特性：

TRANSPORT (instr, th, ...)

MOVE (th, path, ...)





Kaufmann によれば、窓やドアなどの垂直軸に展開する二次元的な対象は、三次元的対象として概念化し直されやすい。この場合、水平方向への三番目の次元は、最小限の長さしか持たないが、しかしこの最小限度の延長を経路として完全横断するのだというのだ。次章で批判するが、この説明はずいぶん恣意的である。とりあえず、これを受け入れるならば、結局、(20) の b と c の解釈は、領域の完全横断という意味では同じ性質のものだということだ。そうすると、この点についての主張は以下のように単純化されるが、これは (8) の経路  $D(x)$  とコンテキストにおいて決まる対象  $y$  の交差線  $Sc(y)$  の包含関係の解釈と同じことになる。

- 21) **durch** は標準的には完全横断の解釈がなされる。無冠詞の集合名詞や複数名詞が内部項であったり、移動の動詞の付加部として使われる場合には、不完全横断の経路の読みが可能である。

以上が、Kaufmann の二段階意味論を使った **durch** の分析の大枠である。思いきって要約する。**durch** の意味形式が基本的に (7) に示した通りだとして、この意味形式 SF 中に標記されている経路パラミター  $D(x)$  は概念構造 CS とのインタラクションによって、その指示する内容が確定する。経路が領域完全横断の達成との関係で重要なのか、それとも、領域の内部をたどるプロセスとの関係で重要なのかなど、この前置詞の外部項、内部項、およびコンテキストから与えられる情報によって、経路パラミター  $D(x)$  の概念的な内容が記号処理的に確定される。意味形式と概念構造とのインタラクションとは、具体的には、このプロセスのことである。

### 3. Kaufmann の議論の批判的検討

私はこれまでの自分の仕事(竹内 95 など)で、言語表現の意味理解にとって知識の働きが重要なのであるということを主張し続けてきた。その意味で、

Kaufmann の知識重視の姿勢は理解しやすいものである。しかし、そういう問題とは別に、Kaufmann は、二段階意味論という明快な枠組みに基づいて *durch* の意味について、大胆で具体的な議論を展開している点を高く評価したい。おかげで、この仕事の論点を批判的に検討しながら、私は、これまで漠然と考え続けていた問題をうまく整理することができたのである。

具体的な問題の検討に入る。Kaufmann の例を再び引用するが、(10)の外部項の指示対象は移動の媒体であって、方向性があるのだという。他方(12)の外部項の指示対象は境界づけをするが、方向性はないのだという。

- 10a) die Straße durch den Park
- b) die Leitung durch den Garten

- 12a) der Zaun durch den Wald
- b) die Mauer durch Berlin

道や電線・水道管が移動の媒体であり、柵や壁が境界づけをする対象であることまでは理解できる。しかし私には、前者には方向性があるが、後者にはそれが無いという議論の前提がよくわからない。道は人が双方向に行き来するものであるし、電線については、電流というのはいったいどちらへ流れているものかなど、あまりよくわからない。水道管は、水をいつもと反対側に送るのに使われても、水道管ではなくなってしまうのではない。(9e)に、焼き肉を貫く焼串というのがあって、道や電線・水道管と同様に経路に似たゲシュタルトを持っているとされていたが、焼串は常識的に考えて、物が移動する経路ではない。

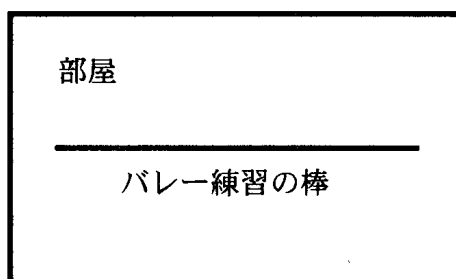
私は、道や電線・水道管に方向性を認めるのであれば、柵や壁に方向性を認められると思う(この点については次章で議論する)。この章の論点として、対象の概念を定義して、道や電線・水道管は方向性があり、柵や壁は方向性はない、とする根拠がとても恣意的であり、議論の基盤として受け入れ難いことを指摘しておく。

方向性を持たず、境界づけをするのでもないじゅうたんや棒のような対象は、完全横断の条件を満たすことができず *durch* と使われにくい(例 (14))。しかしコンテキストによっては完全横断の情報が与えられ、例文 (15) のように *durch* と使われることができる、という説明がされていた。

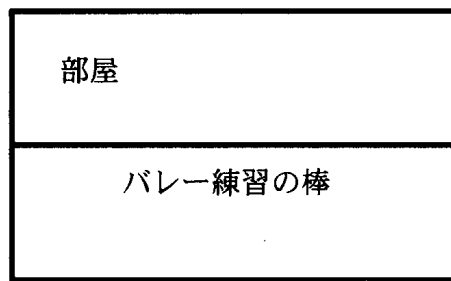
- 15) der Stange quer durch das Zimmer (wurde für Balletübungen angebracht).

私の批判の一つは、この例は完全横断の条件を必ずしも満たさないという点にある。普通この例文を読んで理解されるのは、バレエ練習用の棒が部屋のかなりの部分を横切っているのであって (15'a)、完全に端から端まで (15'b) ということではない。そんな具合に棒を渡してしまったら、棒で区切られた部屋の半分から半分へ移動するのに棒の下をくぐったりしなければいけないし、バレエの練習がしにくいだらう。

15'a)



b)



もう一つの批判：じゅうたんのような対象であっても、(14a') の例のように、コンテキストの情報によって、**durch** と使うことができる。この場合に重要な情報は横断に関する情報ではなくて、対象が**十分に長い**という情報ではないだろうか。(22)の例は、方向性や境界づけの性質を持たない名詞が、横切るという情報によって **durch** と使われていても問題のない例として Kaufmann が示しているものである。この例もまた、長さという情報が、**durch** の外部項になる名詞の適格性に関係していることを示しているのではないだろうか。

- 14a') Wir hatten einen sehr langen Teppich durch den Flur, darauf begab sich der Trauerzug langsam, sehr sehr langsam ...

- 22) Die Schlange steht mitten durch den Supermarkt.

ここで批判した、二つのことがらは相互に関連している。バレエ練習用の棒が部屋を完全に横切っている必要がないように、長いじゅうたんや、行列がフローアーやスーパーマーケットを完全に横切っている必要はない。横断線

の相当部分を占めていることが大切なのである。そして、この横断線の相当部分を占めるためには、横切る対象は、十分に長いことが必要なのである。

(18a, b) の例で、Kaufmann は、境界のない対象の場合は完全横断の解釈にならないことを示そうとした。しかし、バレー練習用の棒と部屋の関係で指摘したように、境界を持っている対象についても厳密に言うと、完全横断の解釈が難しいこともある。確かに、完全横断的な解釈が好まれる対象、そうでない対象があって、それは対象に境界があるかどうかと関係しているようでもある。しかし、そのような関連が何らかの本質的な性質のものなのかという点には疑問が残る。その一方で、(18) の例文では、通過するのに困難な場所をかきわけながら移動しているというニュアンスが強いのに、そのことには何の言及もないのには不満が残る。

- 18a) Er wadet durch Matsch.  
b) Er wandert durch Wiesen und Wälder.

映画「ショーシャンクの空に」の脱獄場面を思い浮かべながら (24) の例を読んで欲しい。この場合、苦しい脱走の格闘を表現するのにはどうしても **durch** を使いたい。それも、下水の排水管を抜けられる (完全横断) かどうかにかかわらずである。また、例えば (24b) のように、移動の場が移動する対象と一緒に動いていく場合、この **durch** は移動の原因としては理解できるけれども、空間的な意味で理解するのは難しい。空間的な **durch** には、何か移動とそれにとまなう摩擦や困難が関係しているのである。Kaufmann は空間の問題を扱っているから、こういう事象に触れる必要がないと考えたのかもしれないが、私にはこの点が大切なものに思われる。

- 24a) Er kroch durch das lange und schmutzige Abwasserrohr, aber konnte den Ausgang nicht erreichen/ und endlich war zum Ausgang gekommen  
b) ??Der Ballon verfängt sich nun einem großen Aufwind. Er kommt durch diese Luftmasse immer herauf.

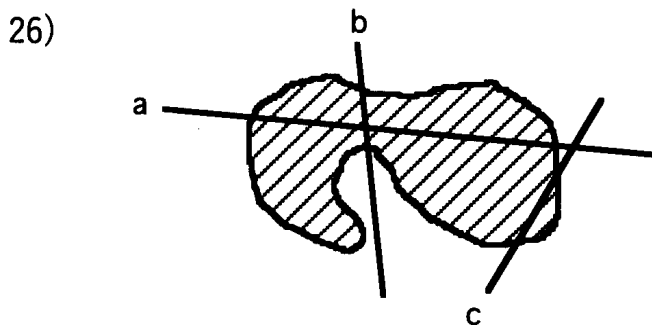
二次元的な対象が内部項になる場合に、ドアや窓のような垂直方向の対象は、三次元的な再解釈を受けやすく、その結果経路が横切る空間ができるのだと説明されていた。しかし、(25) の例を見れば、横切られる二次元空間は

垂直方向に沿ったものでなくても構わないことがわかる。いろいろな方向で横断可能な二次元空間が、**durch** の使用について見つけられるだろう。水平、垂直などの軸との関係や、二次元空間の三次元への再解釈が重要なのではなく、何か他の要因が二次元空間についての **durch** の使用を可能にしているのだろう。

- 25a) Ultraviolette Strahlen können durch Ozonschichten des Himmels nur mit sehr begrenztem Anteil bis zu unserer Sphäre ankommen.  
 b) Der Meteorstein ist durch die Decke ins Zimmer herabgefallen.  
 c) Der Bambussprößling wächst durch die Bodenfläche herauf

#### 4. 移動の運動感覚にもとづく説明の試み

前章で指摘したように、横切る対象が横切られる対象に対して**十分な長さ**がなければ **durch** が適切に使用できないことがある。バレー練習の棒が部屋の相当部分を横切っていなければ、**durch** は使えない。そのために棒は**充分長**くなくてはいけない。道も、水道管も、柵や壁も、長いじゅうたんも、行列も**充分長**くなければ、**durch** の外部項の指示対象としては不適合なのである。(26)のように、斜線部の対象があるとすると、横断部分が **b** や **c** では、**durch** の感じがでない。**a** のように**充分な長さ**で横切らないと、**durch** には似合わない。



**充分な長さ**という要因がどうしてそれほど重要なのだろうか。Kaufmann の指摘によれば、経路という認知的対象が生まれる条件は順序によって生ずる方向性、または、異なる二つの場所の連絡関係、のどちらかが満足されることである。ここでは、**充分な長さ**という要件に注目したのであるから、こ

の二つの条件のうちの後者、異なる二つの場所の連絡関係は問題にする必要がないだろう。(26)図の**b**や**c**の短い横断線によってであっても二つの場所の連絡関係という条件は容易に導かれるが、それでは **durch** に似合った表現の対象にはならないのである。ここでは、**十分な長さ**という要件から、方向性が導かれるということを議論しなくてはならない。

私は、**方向性を移動**という概念から導きたいのであるが、**十分な長さ**という要因から、直接、**移動**を導きだし、方向性に結びつけるのは無理である。移動ということは、**fahren**、**gehen**、**reisen**、**waten**、**wandern**などの移動の動詞、またはその派生名詞と一緒に使われる以外には、前置詞 **durch** の使用と直接の関係はない。**Straße**のような、その機能という点で概念的に移動と結びつけられる例ですら、**durch** の外部項として使われるのは、前章で批判したように、移動と関係があり、そこから方向性が導かれるからではないのである。

概念の機能面から方向が導かれるのなら、壁や柵からだって方向を導くことはできる。一人の人間が効率良く壁や柵を作ろうとするなら、一方の端からもう一方の端に向かって作業を進めるだろう。実際には、ベルリンの壁は同時多発的に作られたのに違いないが、それでも **durch** を使うことができるのはなぜだろう。他方、焼串を挽肉と薄切りの肉で包みながら料理を作った場合、肉を突き刺した焼串に比べると **durch** が似合わない。この種の、機能面から導かれる方向性は、**durch** の使用に何らかの役割を果たしているには違いない。しかし、多発的に工事が進められた壁や柵にも、包み込み方式の焼串料理の串にも、それが十分な長さで対象を横切っているなら **durch** が使える、ということについては、何か別の重要な要因が関係しているのに違いない。

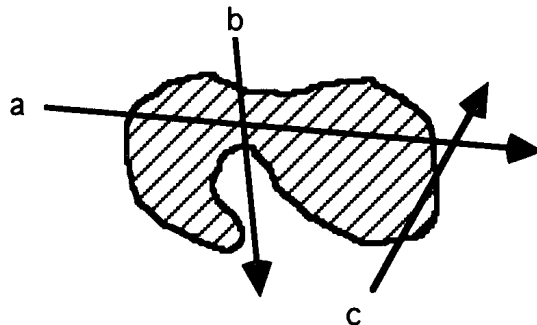
私の考えでは、十分な長さを持つ線については、認知上必ず観察の方向というものが生ずる。これは、それぞれの対象について、個別の概念内容に対応するのではなく、「長いものには観察の方向が生ずる」という認知の一般法則があるのだと考えたい。**Lang** の二段階意味論では、観察の軸は、対象スキームの最長軸に一致するか(デフォールト)、または対象固有の観察軸など、その他コンテキスト依存の観察軸に一致するということであった。対象に十分な長さがある場合には、長さに沿った観察方向が優先され、それ以外の場合には、食器棚の正面のような固有の観察方向がとられるのであり、この点については私の考えは **Lang** と同じである。

長いものについての観察の方向は、視線の移動とそれにとまなう認識の順

序、またはまなざしの進行についての一般的感覚から生まれる。長いものを見ると、視線は近くから遠くへ移されるのが自然だ。だから、認識の順番は近くから遠くのものに向かうのが自然である。遠くの導火線の火を見つけて、線をたどって見たら自分の足元に爆弾があって逃げ出すというのは、笑い話の種になるが、それは自然な認識の秩序に反するからだ。視線に方向があるのは、目という知覚装置が自分自身を構成している原点の一つに他ならないからだろう。どんな知覚対象であっても、目より目には近づけず、視線は目から知覚対象に向かう。**知覚対象が目に飛び込む**という感覚が**視線を向ける**という感覚に対して優先されるということがあるのだろうか。

移動という観点から (26) 図の直線を矢印に置き換えて、対象を貫くことをイメージすると、**durch** と**十分な長さ**との関係がわかりやすくなる。体を剣や銃弾が貫く場合に、図の端や薄くなった部分を通ると、**durch** は使いにくい。**貫き**には**十分な長さ**が必要であるからだ。観察の方向を媒介として移動を導入すると、**貫き**との関係から、前章で提起した**十分な長さ**という論点についての納得のいく説明ができそうである。

26')

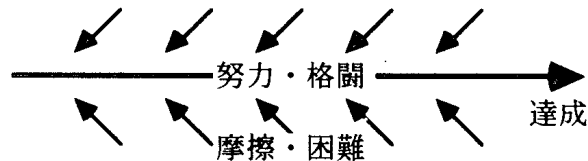


**移動**という概念を中心に据え、前章で問題にした残りの論点二つを料理したい。**durch** の使用によって、**困難な移動**と**格闘**という解釈が出てくるのはなぜかというのが一つ目の問題であった。二つ目の問題は、平面という二次元の対象を、その最短距離である三番目の軸によって貫くような表現が **durch** によってなぜ可能なのかということであった。二つの問題を一気に論ずる。

移動という概念の哲学をする。移動の本質部分には**苦勞・困難** vs. **簡単・楽**、**達成** vs. **失敗**の対立がある。我々の環境が物質、エネルギー、摩擦と重力に依存している以上、移動は**困難**なものであるし、坂を駆け降りるような**楽**もある。移動は意志による行為であり、**成功**、**失敗**が必ずある。**簡単さ**を追求してより深い知恵をしぼるのが賢さの本筋だと思うが、残念ながら私たちの関心の多くは**苦勞**を避けることに向けられてきた。他方、**困難・失敗**を案じる

悲観主義よりも**達成・成功**を思う楽観主義が(環境を破壊し続けながら)戦争や災害の困難を生き延びる力を人間に与えてきた。この二つの対立のバランスの上に移動を実現させる力が**努力・格闘**なのだ。これらの関係は**移動**という概念の価値にかかわっていて、簡単に図示すると(27)のようになる。

27) 移動概念の価値スキーム



このように図示した移動概念の価値スキームをじっくりと観察してみれば、ここで取り組んでいる二つの問題は、このスキーム中の**摩擦・困難・努力・格闘**の部分、または、**達成**の部分の、どちらに焦点が当たるかの違いによって発生していることがわかる。基本的に考えて、**摩擦・困難・努力・格闘**とは継続的なものであり、**達成**とは状況の変化であり、瞬間的なものなのである。

Kaufmann の指摘するように、横断される対象に境界がないと完全横断の解釈ができない。しかし、そのことは問題の本質に関係してはいない。横断される対象に境界がないということは、移動概念の価値スキーム中の**摩擦・困難・努力・格闘**の部分に焦点が当たり、継続的な時間の読みがされる、そのためのコンテキスト条件の一つの可能性にすぎないのであって、現象を説明する理論の核心を構成するものではないのである。

**移動に伴う困難**や**困難の原因**について私たちはいろいろな常識を持っている：**経路の狭さ、長さ、複雑さ、ぬかるみ、茨のやぶ、貧困**、等々。だから私たちには(28)の例文が(29)の例文よりもなじみやすい。さまざまな甘い誘惑の試練を耐え忍ぶ行者のことも思い浮かべない限り、(29)の表現を理解することは難しい。(29)の例に適切な前置詞は、常識的には in なのである。

28) sich durch Dornen drängen  
das Leben durch die Armut

29) ?das Streben durch Luxus

窓などの二次元対象が **durch** による横断の対象になりえるのは、窓が垂直軸に沿って立っている結果、三次元的に再解釈がなされるからではない。二次元対象は内と外などの質を異にする空間を仕切っていることがある。そんな場合は、二次元対象の横断によって瞬間にして**状況の変化**が起きるから、移動の価値スキームの**達成**という部分に焦点を当てた **durch** の使用にむしろ適しているのである。

**durch** という前置詞には、空間関係の表現以外に、(30) のような**原因**を表わす用法がある。この前置詞の意味の核心部分に**移動**の概念があり、価値スキームによって**摩擦・困難・努力・格闘**の概念が導かれることから、この**原因**の用法の由来を探ることができるかもしれない。ことさらに**摩擦・困難・努力・格闘**などが生じない限り、何かの事態が生じはしない。自然が破壊されるのは、人間の生活と自然の間に**摩擦**が起こるからであり、それにもかかわらず、**快楽**の追求に突き進むからである。通時的に考察するとどうなのかはわからないが、共時的にはそのような関係についての知識が **durch** の使用の背後で働いていると考えて不自然ではない。

### 30) Naturvernichtung durch menschliche Tätigkeiten

## 5. 運動感覚を中心に据えた意味論の人類学的裏づけと研究の展望

Anette Herskovits 1986 は英語の前置詞 **on** の単純幾何的關係モデル (31) を示しながら、**X** が **Y** を支えているという、**Supports (X,Y)** の部分は純粹幾何学的な性質のものではないと述べている。Herskovits は前置詞の様々な意味現象を、幾何学的な空間関係での理想的意味からの逸脱として扱っているので、惜しいことに、この「幾何学的ではない」部分のことは問題になっていない。しかし、私が本論で展開してきた議論が正しいならば、本当はこの幾何学ではない部分が注目されるべきなのである。この部分こそ、本論で問題にしたい、動作という、人間の認知において幾何学的空間関係などと同様に、中心的なことがらの一つなのである。

$$31) \quad \text{On}_1(X,Y) \longleftrightarrow \text{Supports } (X,Y)$$

and

$$\text{Contiguous } (\text{Surface}(X), \text{Surface}(Y))$$

**抵抗や困難**に逆らいながら遂行される移動というものがある。そもそも多くの文化は、文化構成グループの存続をかけた移動や旅を経験しつつ歴史を生き抜いてきた。多くの文化が継承している叙事詩には旅を扱ったものが多い。人間の夢のある部分は必ず、未知の世界への旅立ちというテーマによって占められている。趣味の山登りから探検・冒険、海外旅行・宇宙旅行、自動車レースと、**移動**という課題に立ち向かうことに私たち人間はこだわり続けている。人間という動物にとって、**移動**ということは非常に重要な意味合いを持っていたのであり、今後もそうであり続けるのにちがいない。そんなわけで、**苦労や困難**をともなう**移動**、精魂を傾けて突き進む**移動**というものは、人間の認知的単位として格別のステータスを持っているのではないかと私は思う。

前章で私は移動概念の価値スキームを (27) として、矢印を組み合わせる工夫をしながら提示しようとした。この標記によって示されるべき内容は、記号主義的な立場を取れば、いくつかの命題の組み合わせによるネットワーク構造として提示できるものなのだと考えたくなるかもしれない。しかし、私は、あえて、ここで注目すべきなのは運動感覚であり、移動の運動感覚の総体が記号形式によって標記できるものかどうかという点について懐疑的な姿勢を取りたい。私は矢印を組み合わせた (27) の標記にも不満なのである。

(32) のような写実的な連続画像は、まだ十分ではないにしても、**困難な移動の運動感覚**をよりよく提示しているように思われる。足をとるぬかるみの粘りと皮膚感覚、腕に絡み付く木の枝・やぶ、立ちこめる湿気・臭気、疲労感、そのような感覚は私たちの中に生きているのだ。このような心的対象は何らかの形で近似的に標記するしかない。そのことさえ了解していれば、論理式を使おうと、矢印や絵を使おうと、私は、構わないと思う。

- 32) 悲しみの沼を行くアトレイユとアルタックス。映画「ネヴァーエ  
ンディングストーリー」より)



ものごとをより基本的な次元での、より本質的な関係に基づいて説明するのが一般的な科学の態度である。星の中には、地軸を中心にした円を描かずに、うろうろと不規則な動きをするものがある。それを観察して、惑星という分類をしていた昔の人の知識は正確なものであった。しかし、地動説は、惑星の動きを、太陽の周りを規則的に回転する星の間の相互観察による見せかけである、と見抜いた。惑星の動きという現象の解明から、引力や質量による天体全体の動きの原理に迫った天文学の進歩によって、私たちのものの見方は格段に深まった。この論文では、長さに関係する視線の方向と運動感覚としての移動概念を中心に据えることによって、前置詞 **durch** が見せる、現象としては統一性のとれない意味の問題を、共通の基盤から説明した。空間の幾何学的な関係を手がかりにした **Kaufmann** の説明にくらべて、より深い説明ができたのではないだろうか。

意味研究の進展にしたがって、明らかにされるべき対象の微妙さや複雑さが増している。これは、言語が生身の人間の最も複雑な行動の一つである以上、当然のことである。であるならば、言語研究の道具は、いつまでも初等幾何レベルの単純なものでよいはずがない。身体・運動感覚というものは、私たち人間の感覚の中では軽視されがちであるけれども、ことのほか重要であり、記述の難しいものである。その点で、私たちは身体や心についての実証的科学により強い関心を払い続ける必要がある。他方、言語研究者は、そのことを承知した上で、言語現象に対して、具体的に批判可能な形で大胆に切り込んで行くべきである。身体・運動感覚という切り口から、意味論の世界のより面白い掘り込みが追求できるのに違いない。

#### 文献：

- Bierwisch, Manfred 1983: "Semantische und konzeptuelle Information lexikalischer Einheiten". In: R. Ruzizka & W. Motsch (eds.), *Untersuchungen zur Semantik*, 61-99. Berlin: Akademie-Verlag.
- 1988: "On the grammar of local prepositions". In: M. Bierwisch, W. Motsch & I. Zimmermann (eds.), *Semantik und das Lexikon*, 1-65. Berlin: Akademie-Verlag.
- Herskovits, Anette 1986: *Language and spatial cognition: an interdisciplinary study of the preposition in English*. (Studies in natural language Processing). Cambridge U.P. (堂下、他訳「空間認知と言語理解」、オーム社、1991)

- Lang, Edward 1987: "Semantik der Dimensionsauszeichnung räumlicher Objekte", in: M. Bierwisch - E. Lang (eds.), *Grammatische und konzeptuelle Aspekte von Dimensionsadjektiven*, 287-458. Berlin: Akademie Verlag.
- 1993: "The meaning of German projective prepositions: A two-level approach". In: Cornelia Zelinsky-Wibbelt (ed.) 1993: *The Semantics of prepositions: from mental processing to natural language processing*. Mouton de Gruyter. 250-291.
- Kaufmann Ingrid 1993: Semantic and conceptual aspects of the preposition *durch*. In: Cornelia Zelinsky-Wibbelt (ed.) 1993: *The Semantics of prepositions: from mental processing to natural language processing*. Mouton de Gruyter. 221-247
- 竹内義晴 1994: 言語表現の意味理解と認知システム—ドイツ語の形容詞 "schwer" と "leicht" の解釈における推論、類推、比喩・見立て・イメージの拡がり、認知型の働き。金沢大学文学部論集、文学科篇 14 号、13-27 ページ